

三巻本『枕草子』「春はあけぼの」章段のしくみについての私見

原 由来恵

はじめに

『枕草子』「春はあけぼの」章段は、学校現場において必ず取り上げられる古典教材である。その本文は次のとおりである。(注1)

春は、あけぼの。

やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明りて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

夏は、夜。

月の頃は、さらなり。闇もなほ螢の多く飛び違ひたる。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。

雨など降るも、をかし。

秋は、夕暮。

夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへ、あ

はれなり。

まいて、雁などの列ねたるが、いと小さ見ゆるは、いとをかし。

日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬は、つとめて。

雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎ熾して、炭もて渡るも、いとつきづきし。

昼になりて、温く緩びもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わろし。

さて、この章段の一般的な解釈は、一年四時各季の好ましい時分・天象・景物を対比して評論したものなどとされ、学校教育では

○古典的リズム ○日本の四季の感興 ○作者の独自性

といったことを基本として各教材学年の児童や生徒に対応した教材使用が行われる。

しかし、こうした取扱いだけで、はたしてこの章段を読み解いたことになるのであろうか。この章段が、本作品の冒頭におかれていることの意義、つまり

(1)なぜ作者清少納言は『枕草子』において、この「春はあけぼの」をしたためたのであろうか。

(2)ここに託されたものは、はたして作者の好ましいと思う事象類を評論するものだけであつたのであろうか。

という二つの問題が浮ぶ。そこでこの二つの疑問を土台として、本稿では、三巻本『枕草子』「春はあけのぼの」章段において特に「春」と「あけぼの」が意味する意図に着目し、

①コンテクストと跋文から見る作品構成

②章段テキストに見る表裏

③言語遊戯と機知

という三つの視点から「春はあけぼの」章段における、「春」と「あけぼの」の関係が、中宮定子及び中関白家栄華を託す序文であること。また章段形成の基軸には、作品の随所に見られる言語遊戯と機知という作者の表現力が介在するという二点について私見を示したい。

一、作品構成からの「春はあけぼの」章段

「春はあけぼの」章段は、『枕草子』の諸本四系統全てに掲載されている。本稿はあくまでも三巻本系統の『枕草子』における「春はあけぼの」章段を中心に論じるが、念のため諸本間における本章段の位置を確認すると、三巻本と同じく雑纂である能因本系統では、やはり初段に配置されている。また類纂である前田家本、堺本系統でも、類型別に配列された章段中とはいえ、やはり初めに「春はあけぼの」章段がおかれている。

さて、これら四系統における本章段の大まかな概要はほぼ同じである。本文間の異同に関しては、「春」の箇所だけでも次のように見られ、表現上における差には問題がある。^(注2)

【「春」における異同^(注3)】

堺	そらはいたくかすみたるに	のはの	つつ
前	そらはいたくかすみたるに	の	つつ
三	春はあけぼの・・・・・・・・・・やうやう白くなりゆく山ぎは・すこし・		

能

堺　　み

もいとをかし

前　　み

三　あかりてむらさきだちたる雲のほそくたなびきたる……
能

また「春」の後に続く「夏」「秋」「冬」においても、四季に対する表現の差があり、原『枕草子』の成立や善本検討の確認が必要な問題の存在を考えさせる。

しかし異同があっても内容に関しては、大筋では大きな差を認めることはできない。

さて、三卷本『枕草子』作品全体の構成に目を向けると、三卷本には跋文が附記されている。ちなみに能因本には、短跋と長跋が載る。これらの跋文成立については、問題が残るもの^(注4)、現作品に存在する以上、作品構成において無視することができず、ある種の役割を担うものとして扱いたい。

この跋文には、『枕草子』執筆経緯や作品流布の事情などが記されている。そこで改めて「春はあけぼの」章段の作品における位置づけは、三卷本も能因本も、この章段は初段として設定されており、跋文に呼応する関係にあるといえる。換言するならば「春はあけぼの」章段には、序文的役割が課せられていることになる。とすれば、改めていうまでもなく、『枕草子』の作品構成は、「春はあけぼの」が作品の始発となり、それに対応して、まとめの跋文が記載されているといえる。

そこで、まずこの跋文に着目すると、

この草子、目に見え、心に思ふことを、「人やは見むとする」と思ひて、つれづれなる里居のほどに、書き集めたるを、あいなう、人のために便なきいひ過ぐしもしつべきところもあれば、「よう隠し置きたり」と思ひしを、心よりほかにこそ、漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつりたまへりけるを、

「これに、何を書かまし。主上の御前には、『史記』といふ書なむ、書かせたまへる」
など、のたまはせしを、

「まぐらにこそははべらめ」

と申ししかば、

「さば、得てよ」

とて、賜はせたりしを、あやしきを、「こよや」「なにや」と、尽きせず多かる紙を書き尽くさむとせしに、いとものおぼえぬ言ぞ多かるや。

大方、これは、世の中にをかしき言、人のめでたしなど思ふべき名を選び出でて、和歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出だしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」と、譏られめ。ただ、心一つにおのづから思ふ言を、戯れに書きつけたれば、「ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をもきくべきものかは」と思ひしに、「恥づかしき」なんどもぞ、見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。

げに、そもことわり、人の憎むを「善し」といひ、褒むるをも「悪し」といふ人は、心のほどこそ推し量らるれ。ただ、人に見えけむぞ、ねたき。

左中将、まだ「伊勢守」ときこえし時、里におはしたりしに、端の方になりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ、返りたりし。それより、歩き初めた

るなめり。

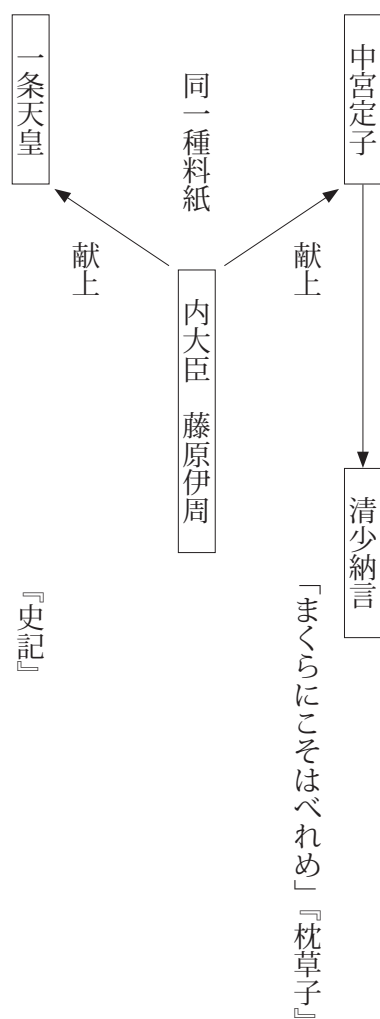
とぞ、本に。

とあって、注目すべきは、傍線部に見られる作者清少納言と中宮定子とのやり取りである。

献上された料紙に何を書くのか、一条天皇は『史記』をお書かせになっている、という問いかけに対して、清少納言が「それはまくらでございましょう」と返答した。このことによって、「そうね、それならばあげましょう。」とその紙を清少納言に下賜された。その料紙に「これもあれも」と尽きることがないほど多くの紙を全て書いてしまおうとしたために、『枕草子』の内容が全くわけのわからない言葉が多く記載されたものになってしまったとしている点である。ここでこの跋文を信じるならば、本稿の「春はあけぼの」章段のしくみに関わる二つの大きな疑問がわく。一点目は、なぜ清少納言は『史記』に対して「まくら」としたのかということであり、そして我々には謎である解答に対して、中宮定子はどのように承して料紙を清少納言に託したのだろうかというものである。二つ目は一つ目の疑問に連動して中宮定子から個人的に賜わったとはいえ、帝と中宮それぞれに献上された同一種の紙に、清少納言が個人的な心情を勝手気ままに記すことが、可能であったのかという点である。

既にこの跋文に対しては、作品名称を含めた様々な見解を諸先学は指摘してきた。しかし、現段階において、その問題が明らかであるとは未だに言いがたい面もある。そこでこの文中を整理してみたい。跋文にある状況を図式化すると次のような関係となる。

【跋文に見る料紙献上と記載書の図】



献上同一料紙及び献上者を軸に帝と中宮は対称する。また跋文中にあるとおり料紙に記載される内容もまた相對して見ることが出来る。そこで『枕草子』が『史記』に対応する位置づけであることは認めざるを得ない。そこでまず、『史記』の概要及び一条天皇朝における『史記』の受容を踏まえておく。

『史記』は周知のとおり、黄帝から武帝までの時代を「本紀」「表」「書」「世家」「列伝」とした紀伝体で編まれた一三〇卷の中国正史であって、○皇帝の歴史○年表系図など○書物○世襲の家○人物伝が記述されている史書である。

日本における『史記』受容は早く、『続日本紀』『万葉集』など上代成立作品や平安時代初期に編まれた勅撰漢詩集『懷風藻』などにもその影響が見られる。平安時代における『史記』については、川口久雄氏の『平安朝日本漢文学史の研究』^(注5)に詳しいが、それら先行研究を踏まえると、当時の人々にとっての『史記』はおおよそ、

○大学寮の寮試に出題、また紀伝道（文章道）におけるテキスト。

○政治上の故実先例を知る上で欠かせない官僚の必読書。

○宮廷や貴族の文亭・大学寮・私学において、しばしば『史記』講書を開催。

その際には竟宴があり詠史探題詩が作成された。

といったものであったとされる。『枕草子』「文は」章段にも、

文は文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

とある。また『源氏物語』「乙女」^(注6)巻には

四五月のうちに、史記などいふ文は読み果て給ひてけり

とあり、官僚を目指す貴族の子息たちにとっては、教養として不可欠であった様子がうかがえる。さらに『源氏物語』には、『史記』からの漢詩句引用が十四箇所ある。

また『紫式部日記』には

文読む博士、藏人弁広業、勾欄のもとに立ちて『史記』の一卷を読む

と見える。これは中宮彰子の御子出産後に行われた「御湯殿儀」においての様子であるが、ここから一条朝においても皇子誕生において『史記』が誦じられていたことが確認できる。

また『史記』の影響は、初の勅撰集となった漢詩集『凌雲集』や『文華秀麗集』『経国集』『本朝文粹』等の詩文にも認められている。さらに平安後期成立の『大鏡』が『史記』に倣う紀伝体をとっていることもまた、一般認識となっている。こ

れらを鑑みても、一条天皇側において『史記』を料紙に記載させたことは、けして不自然な行為ではない。ただし一三〇巻全てを記述させられるほどの紙量が献上されたのかについては、本文にないため、記載箇所までは判じ得ない。

ここまで、清少納言の生きた時代における『史記』について踏まえた。『枕草子』の構成からこの『史記』に対して「まくら」とした、その序文的役割が「春はあけぼの」章段ということになる。

二、「春」と「あけぼの」の表裏—時間推移

「春はあけぼの」章段は、春夏秋冬において、作者がその時々における時節素晴らしい頃合を表記した章段とされる。しかし、このテキストを見たときに、疑問は深まるばかりである。序文的役割を持つ初段で、まさに作品のはじまりに、なぜ「春」と「あけぼの」を良しとしたのか。実際それまでの勅撰和歌集にも「春」と「あけぼの」の組み合わせは見えず、筆者の特異性が見られる作品の幕開けである。そこで「春」と「あけぼの」の関係性とその表裏を踏まえるため、当時の時刻認識と季節の整理からその作者の意図を見ていく。

「あけぼの」に近い時間帯を鑑みると、「あかとき」「しのめ」「あさぼらけ」などが浮ぶ。これらの語意を、時代別国語事典上代編（「時」と表記）角川古語大辞典（「角」と表記）によると次のようになる。

●あかとき

【時】【暁・五更】夜明けがた、またその前。明Ⅱ時で、夜明け前のまだ暗いうちをさす。だいたい午前三時から五時ごろ。

【角】【曉】「あかつき」に同じ。上代ではこの形を用いた。「あかつき」古くは現今よりも時間が早く、曙光が差し出す前の、まだ暗い時刻をいう。

●東雲しのめ

〔時〕【細竹目】篠を編んで作った御簾のようなものをいう。御簾の奥にこもって、人に逢わない意の「人にはしのび」に続く語。＊朝を意味する解釈なし

〔角〕【東雲・篠目】夜明け方。暁が明け方に近づきながら、まだ明けやらぬ間。後朝の 別れの刻限。

●あけぼの

〔時〕【会明】明け方。朝＝明ケの約。アカトキより朝に近い時。

〔角〕【曙・會明】「明けほのか」の意。暁を過ぎてから、空がほのぼのと明けそめるころ。物の色彩が次第に明らかになってくる時間。「夕暮れ」に対して用いられる。もと、歌語「しのめ」に対する散文語であつたらしいが、歌語としては『新古今和歌集』前後から好んで用いられた。

●あさぼらけ

〔時〕 記載なし

〔角〕【朝朗】夜のほのぼのと白むころ。「あけぼの」よりやや明るく、既に夜が明けたといえる刻限。

これらから、すべての言葉が上代において使用されていたわけではなく、東雲の「篠目」や、あけぼのの「明けほのか」、「あさぼらけ」のように語意の記載がないなど、言葉の変化や変遷によって使用されるようになったことがうかがえる。また、それぞれの語が少しずつ変わりゆく時間の推移を表すものであり、当時の人々はそれらを使い分けていたであろうことが理解できる。では、それらの語は、和歌や『枕草子』、そして他作品において、どのように用いられていたのか、具体的に作品から踏まえておきたい。

あかとき

暁と夜烏鳴けどこのをかの木ぬれの上はいまだ静けし

暁の夢に見えつつ梶島の磯越す波のしきてし思ほゆ

『万葉集』一七二九

さて、「あかとき」は最も夜に近いとされていたため、「夢」や朝日の前に鳴くとされる「鳥」が共に詠まれている。掲載した一二六三番歌を見ると、鳥は鳴いているが他はまだ目覚めず、夜の静寂が続いている状況が表現されている。つまり「あかとき」は、いまだ夜とも朝とも区別が付かないほどの時間帯を示す語として使用していたことが確認できる。

また『枕草子』には「あかつき」に関しての用例数が二十八箇所見える。その中でも、特に朝を表す語の連続性が見られ、時間帯によって使い分けがなされている「すさまじきも」章段から『枕草子』における特徴もここで踏まえておく。

すさまじきもの昼ほゆる犬。春の網代。（略）

除目に官得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者ども、ほかほかなりつる、田舎だちたる所に住む者どもなど、みなあつまり来て、出て入る車の轅にひまなく見え、物詣でする供に、われもわれもと参りつかうまつり、物食ひ酒飲みのしり合へるに、果つる暁まで門たたく音もせず。（略）まことにたのみける者は、いと嘆かしと思へり。
つとめてになりて、ひまなくをりつる者も一人二人すべり出でていぬ。

さて、この章段は「不調和で興ざめなもの」をとりあげ様子を描いた章段である。引用箇所は、除目に官職を得られなかった家の興ざめさを描いたところである。

この度は必ず任官すると聞いていた家に、以前仕えていた者たちなどが集まって飲み食いの大騒ぎをして吉報を待っていた。しかし任官詮議終了の夜明け方頃「あかつき」になっても何もない。結局任命されず、翌朝（夜が明けた早朝）「つとめて」に、隙間なく控えていた者たちはこっそり帰って行く。

ここで作者は、夜明け前と夜が明けてからの時間推移を「あかつき」と「つとめて」で使い分けをしている。

東雲

夏の夜のふすかとすれは郭公なくひとこゑにあくるしののめ

しの、めのほがらほがらと明け行けばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき

しののめのわかれををしみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

しののめにあかて別れた本をそつゆやわけしとひととはとかむる

これらの例文に見られるように「しののめ」は、「きぬぎぬ」とその「わかれ」と共に詠まれていることから、人々が起きたし朝の身支度も終えた頃として使用していたといえる。また、「あかとき」の時にはなかった「明け」という言葉があることから、太陽が昇り少しずつ白み始めた頃であることがうかがえよう。

あさぼらけ

あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れる白雪

琴笛などして遊び、物かたりなとし侍りけるほとに、夜ふけにければまかりとまりて

あさぼらけしたゆく水はあさけれと深くそ花の色は見えける

あけぬれはくるものとは知りなからなほうらめしきあさぼらけかな

また『枕草子』「木の花は」章段には、

朝露に濡れたる朝ぼらけの桜に劣らず

といった表現が見られる。さてこの「あさぼらけ」は、「有明の月」と共に詠まれること。また、『拾遺和歌集』六七二番歌「夜が明けると、あさぼらけがくる」というように、すっかり夜が明けた頃を示す語として使用されており、明け方を示す語の中で最も明るい時刻といえる。

『古今和歌集』一五六

『古今和歌集』六三七

『古今和歌集』六四〇

『後撰和歌集』七二一

『古今和歌集』三三二

『後撰和歌集』一三〇

『拾遺和歌集』六七二

では「あけぼの」の使用例はどうか。

あけぼの

仁徳紀三八年七月 未及昧爽。有獵人以射牡鹿而殺。

推古紀一九年五月 取鷄鳴時。集于藤原池上。以會明乃往之。

孝德紀大化元年七月 其收牒者、昧旦執牒奏於内裏。

『日本書紀』

明るさからいえば、確実に「しのめ」より、はつきりと周りが見渡せることがうかがえる。また使用の状況では、狩りや内裏に赴く時間。さらには、起床してからしばし時間が経過している時間帯を示すものとなっている。なお勅撰和歌集に見られる「あけぼの」の初見は、次に引く『後拾遺和歌集』一一〇二番歌となる。

花さかり春のみやまのあけほのにおもい忘るな秋のゆふくれ

この歌は確かに「春」と「あけぼの」の関連性が見える。しかし『後拾遺和歌集』の成立期を思うと、『枕草子』からの影響といえるだろう。このことについては西山秀人氏の論から学ぶところが大きい。^(注8)

たしかに『枕草子』以前にも「あけぼの」の使用例は見られる。しかし『枕草子』ですら「あけぼの」の使用例は、「春はあけぼの」章段の一例のみである。

この「あけぼの」に関する概念を、石田穰二氏が『源氏物語』から検証している。その説も踏まえて時間的概念を踏まえる。^(注8)

月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えて、なかなかをかしきあけぼのなり

「帚木」

あけぼのの、やうやうものの色わかるるに

「橋姫」

この二例から「あけぼの」の明るさが見出し、「帚木」では、有明の月はすでにその光を失っているが、影がはつきりと見えて空に浮ぶ時間を示している。また、「なかなか」と副詞を用いていることから、有明の月よりもかえってあけぼのの時

間帯の方が情緒があることすら述べるとしている。また「橋姫」では、「あけぼの」の後に、『枕草子』と同様に「やうやう」の語が後が続くためだんだんと明るくなって周囲が見えはじめる時間帯であるとしている。

ただし本稿では、この「橋姫」の例に対しては、巻の成立問題があると考えるため、あくまでも説の用例としてのみ触れるが、面白い用例と見て^(注)いる。

さて、「帚木」からの例に「有明の月」が登場したが、『枕草子』「月は」章段には

月は、有明の、東の山際に、細く出づるほど、いとあはれなり。

とあり、「有明の月」を素晴らしいとしている。そもそも、「有明の月」は『万葉集』においても、男女がともに過ごした夜の明ける時分を指し、男が女の許から帰る頃や女が男を待ち明かした頃に出る月としており、和歌において叙情的な風情を示す語の一つであった。その前例を踏まえながら『源氏物語』「帚木」では「有明の月」を詠むにあたって「あけぼの」の時間を用いたといえる。また、『源氏物語』「明石」「幻」に「あけぼの」と夕暮れの頃を対比させた表現が見える。

つれづれなる夕暮、もしは、もののおはれなるあけぼの

「明石」

かくのみ歎きあかし給へるあけぼの、ながめくらし給へる夕暮れなどの

「幻」

ここから、夕暮に対して「あけぼの」を用いたことが確認できる。

なお『源氏物語』には、朝方を表す語に「朝ぼらけ」が十九例見られるが、それらは「明け果つるままに」や「ほのぼのと明けゆく」とともに使用されることが多い。

さて、『枕草子』以前の「あけぼの」例は『日本書紀』が初出である。しかしその後の散文作品における「あけぼの」使用数を見ると、『枕草子』以前の使用例は、『蜻蛉日記』の一例、『宇津保物語』の三例のみである。また和歌では『枕草子』と僅かな時間差を持つ『源氏物語』「手習」巻が初出となる。それ以降の勅撰和歌集では、前掲の『後拾遺和歌集』一首、『金葉和歌集』一首、『千載和歌集』四首、『新古今和歌集』一〇首である。他の私家集も『枕草子』以降であった。

ここから述べられることは、「あけぼの」が『枕草子』まで和歌において朝を詠むものとして認識された語ではなかったという点である。さらに前掲の『日本書紀』における例を見ても「春」という季節の関わりは見受けられない。

三、「春」と「あけぼの」の表裏―紫立ちたる雲

この「春」と「あけぼの」の組み合わせに対して諸先学は『白氏文集』や漢籍の影響をあげる^(注10)。漢籍の影響に大きな異論はないものの、漢籍受容のみでは、「春はあけぼの」とした理由が腑に落ちない。

これまでの朝における時間推移の表現から「あけぼの」を捉えると何かが見えてはじめる、現れ立つ時間となる。その「あけぼの」に何を見出させようとしたのか、ここでテキストに戻って考えたい。

春のあけぼのが「やうやう」見せたものは、「白くなりゆく山ぎは」と、そこからさらに「少し明りて」次に各自に見えてきたものが「紫だちたる雲の、細くたなびきたる」であった。ここから文表表現の上で「あけぼの」が読み手に見せようとしたものは、日の出とともに立ちこめていく「紫だちたる雲」と、それが時間とともにたなびく様子であった。

『枕草子』における「春」の描写を見ると、初段の様子を再度取り上げる箇所は見受けられない。前述したとおり、他章段において「あけぼの」の例が見えないことが顕著な例である。しかし、後に続く「夏」「秋」「冬」に描かれた内容は、次章段以降においても、類似する場合やその展開が見られ、『枕草子』の序文に相応しいともいえる。つまり「春はあけぼの」と敢えてしたのは、後に続く日の出とともに立ちこめる「紫だちたる雲」を導き出すために他ならないのではなからうか。ではこの「紫立ちたる雲」は何を意味するのか。『角川古語大辞典』によると「むらさきの雲」を次のように解いている。

①紫色をした雲。瑞雲という。

『河海抄・一一』は「むらさきの雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞみる（源氏・藤裏葉）」について、「慶雲

寿星の心歟…帝王世記に云く、堯帝の生るる時、紫雲殿上を覆ふ」として瑞祥とする。

また、仏教では、極楽往生の人の臨終には、阿弥陀三尊がこの雲に乗つて来迎するという。「しうん」とも。

「むらさきの雲うちなびく藤の花ちとせの松にかけてこそみれ」〔兼盛集〕

「仏の渡らせ給ふその日（＝薬師堂へ遷仏ノ日）になりて…紫のくも、筋を断たずたなびきたり」〔栄花・鳥の舞〕

②皇后の異称。

「堀河の後の御葬送の夜　むらさきのくものかけても思ひきや春の霞にならむものとは」〔実方集〕

「むらさきの雲とはきさきの事をいふ」〔三手文庫本能因歌枕〕

辞典に既に用例文が載るが、①を見ると吉祥を表す雲とされる一方で、阿弥陀が来迎する雲として貴い雲という扱いになっている。また②の例は『枕草子』時代は下るものの、興味深い例である。さてこの紫の雲は、和歌において藤の花が咲くさまをたとえることも多い。当然のことながら、紫と藤は非常に関連性の強い言葉どうしである。文学における「ふぢ」の初見は『古事記』応神天皇の条に出てくる「藤の花衣」の伝説は良く知られている。この神話に登場する藤は、その風情や色から上品で高貴な印象として人々に受け止められるとともに、藤原氏ゆかりの花でもあった。

さて、ここで今一度テキストに立ち返る

紫だちたる雲の細くたなびきたる

この一文には、完了の助動詞「たり」重複使用されている。「紫がかっている雲が細くたなびいているのがよい」つまりは、雲が連綿としていく様子を良しとしている。

ここから「春」と「あけぼの」には、表面上においてこれまでにない新しい時間の推移とその美しい景観を想起させる情景描写となっている。しかしその背景にあるものは、中宮定子を暗示させる紫の雲が連綿とたなびく、つまりは中関白家の瑞祥をも暗示する表現の集約で「春」と「あけぼの」が構築されているといえよう。

四、言語遊戯と機知

『枕草子』には、中宮定子と作者清少納言の機知溢るる様子が描写されている。また中関白家や、類聚章段に見られるのコード問題と言語遊戯性についても既に拙稿で述べてきたとおりである。^(注1) それらを念頭にここで改めて、「春はあけぼの」章段の跋文から見る位置づけと、その最たる一文「春はあけぼの」の必要性を鑑みる。

さて、「まくら」は『史記』に対応するものであった。「一条天皇—漢文『史記』」に相對する構造で「中宮定子」を位置づけた場合、「仮名文の「まくら」となる。また『史記』は本紀からはじまることに對するならば、皇帝の夫人から始まるべきとなる。しかしそれでは成立しない。ここで『枕草子』名称考を述べるわけではないものの、『史記』を「しき」と言語遊戯で捉えた場合、「四季」「式」といった文字が浮ぶ。それらは、和歌と関連するものであり、「仮名文の「まくら」に適合する。そのような言葉遊びの連続性から作者が「まくら」とした時、序文にあたる「春はあけぼの」章段には、必然的に四季に準えた構成となる。そう捉えたと「春」の始発は後に連関する必要性が生じる。

つまり夜明というこれからの繁栄を予期させる時間帯に后を暗示させる「紫立ちたる雲のたなびきたる」様子を示せるのは「あけぼの」という時間そのものであったといえる。

また「少し明りて」「紫に色づいた雲」の言葉の集約で連想させる「赤」は春の訪れを感じさせ、和歌でも春に多く詠まれ霞とともに登場する。この、ちなみ「赤」は元服する親王が身に付けることから、春・赤から春宮をも連想させる。『平安朝服飾百科辞典』には

「紫」は禁色の一つで、天皇・上皇・皇太子のほか臣下では特に色を許された貴族の袍に用いられた。女房装束では唐衣・裳のほか、童女の表着・汗衫などに用いた。

着用例は、天皇・上皇は朝覲、日吉・春日・賀茂の参詣、賭射、元服する親王の童装束、内親王入内のときの唐衣。藤原氏では若君の春日詣および昇殿聴許のときなど。五節舞姫、御賀試楽の舞童の唐衣・袍をはじめ、法服の裳・表衣にも赤色があり、賀茂祭、大嘗会御禊の行列に加わる雑色・下仕・笠持なども赤色の狩衣・装束を着た。

とある。つまり「紫だちたる雲」は単に皇后を意味しているのではなく、霞や紫から「赤」を連想し、親王をも暗示させていると読める。そして、和歌で春と共に多く用いられている「立つ」は「即位」を意味する。つまり「春」と「あけぼの」の言語遊戯性を見たとき、ある一定のコードを持つ人々にはその繁栄をも歌い上げた作者の意図を見ることができたといえよう。

おわりに

春には東を関連させ多くの歌にも詠まれる。また『源氏物語』に見られる、六条邸・地方に伝わる『四季の踊』にも「春」と言えば「東」の概念が根底にある。この関連性は皇太子を意味する「とうぐう」を東宮・春宮のどちらでも表せることにも現れる。

これは「東」という漢字の木の間から日が出る様子を表した表意文字としたり、または「トウ」が「登」の音に通ずるため日が登る方角・方位であることから、成長・繁盛に例えられ、五行思想による守護神の青龍から、春⇨東⇨竜（たつ）の関係が成り立つ。

これら「春」に関わる歌語を鑑みても「春はあけぼの」章段における、「春」と「あけぼの」の組み合わせには、中宮定子及び中関白家栄華を託す序文であり、章段形成の基軸には、作品の随所に見られる言語遊戯と機知という作者の表現力が介在していたといえよう。読者はこのこれまでにないこの「春」と「あけぼの」に対して日の出とともに立ちこめていく

「紫だちたる雲」が「たなびく」情景を新鮮に感じ、後の文学史への影響へと派生したと言える。

注記

(注1) 『枕草子』及び他の散文作品は小学館新編日本古典文学全集により、歌集引用に関しては新編国歌大観、また国史に関しては国史大系によった。但し私に字句を改めた箇所がある。

(注2) 諸本間には多くの異同が見られ、特に前田家本、堺本系統との差は表現上大きいものも見られる。この事については、善本研究を改めて考察する必要性が残る。

(注3) 田中重太郎『校本枕冊子』を参考に私にまとめた。

(注4) 跋文成立に関しては三卷本成立と絡み藤原定家との関係性も含め多くの問題が残る。

(注5) 勉誠出版

(注6) 平安文学における『史記』受容については、『大鏡』における批判意識は『史記』の歴史批判に学んだと考えられている。また大江匡房や中御門(藤原)

宗忠・藤原頼長ら当代の碩学が『史記』を愛読していたことが、『江談抄』や『中右記』『台記』によって知られる。なお、平安時代の写本として防府毛利報公会本(『呂氏本紀第九』一卷)、東北大学本(『孝文本紀第十』一卷)、大東急記念文庫本(『孝景本紀第十一』一卷)、東洋文庫本(『夏本紀第二』『秦本紀第五』各一卷)があるが、いずれも国宝。小守郁子氏の『源氏物語における史記の影響』(『名古屋大学文学部研究論集』七、名古屋、昭29)、水沢利忠『史記会注考証校補』(東京、昭32)、小島憲之『上代日本文学与中国文学』上・中・下(東京、昭37、40)、松本治久『大鏡は史記に何を学んだか』(『漢文学研究』一一、東京、昭38)、池田四郎次郎『史記補注』上・下(東京、昭47・50)、川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』上・中・下(東京、昭50)63三訂版、増田欣『太平記』の比較文学的研究』の恩恵を受けた。それらによれば中国の正史の第一。前漢の司馬遷著。百三十卷。黄帝から前漢の武帝までの紀伝体の歴史。十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列伝に分れる。わが国では、『漢書』『後漢書』とともに、三史として奈良・平安時代には文章道の必修の書とされ、一般貴族の不可欠の教養の書としたことが明かである。平安以後も、『史記索隠』『史記評林』などの注釈書を伴って広く読まれ、中世・近世の文学にも多くの影響を与えた。中世には桃源による『史記抄』の注釈も試みられたとある。

(注7) 『枕草子』の新しい後拾遺時代和歌との接点―に「春は曙」が与えた後世への文学の影響力が、『枕草子』の四季描写を入念に抑えて論じられている。

(注8) 「あけぼの」と「朝ぼらけ」(『源氏物語論集』昭46桜楓社)に詳細が載る。

(注9) 「橘姫」の成立を後世としたとき、「春」「あけぼの」の組み合わせから『枕草子』の影響をも鑑みられる。

(注10) 『枕草子』講座(有精堂)『枕草子大事典』(勉誠出版)

(注11) 拙稿「さるがう―日本における遊び文化の基底」(『子どもと遊び』中京大学文化科学叢書14号平25)及び、これまでの拙稿において、『枕草子』におけるコードと言語遊戯から地名類聚章段へのアプローチを行ってきた。それらをもとにして、作品の書かれた意図を示している。

